

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第113号

イザヤ 65:1

平成17年2月25日

ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたがたが、それと同じことを行なっているからです。私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないにしたがって報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。艱難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、悪を行なうすべての者の上により、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。一律法を持たない異邦人が、生まれつきのみで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。一私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。

ローマ人への手紙 2：1～16。

「キリストの証し人」として成熟に至るために理解しておかなければならない六つの基本的な教えの最後は「永遠の裁き」です。神の裁きには人間史という時の中に神が御介入されることにより下される裁きと、人間史の最後に下される個々人の行く先を決定する裁きとがあり、「永遠の裁き」とは後者のことを意味します。新約聖書は、キリストによって執行されるこの「永遠の裁き」が、意外にも一回きりの出来事ではなく、裁かれる対象によって異なる、次の三つの座で下される裁きの総称であることを語っています。1. 神の裁きの座、あるいは、キリストの裁きの座、2. 栄光の位、3. 大きな白い御座。しかし、まずこれらの裁きを考察する前に、聖書が語る『神の裁きの原則』と裁きの執行者について認識を深めておく必要があるようです。

冒頭に引用したパウロのローマ人への手紙から、神の裁きの原則を読み取ることができます。ここでパウロが対象にしているのは異邦人が圧倒的多数を占めていた『ローマの教会の会衆』（「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」1：7）です。パウロ自身が直接出向き、御霊の賜物を分け、会衆を強め、互いに励まし合いたいと切に願いながらも道がはばまれ福音伝道がままならなかったローマの教会では、信仰者同士が自分勝手な基準で裁き合い、他人には厳しい基準を、自分には甘い基準を適用するといった明らかな矛盾が生じていました。盲目状態に陥っていた信者たちにその混乱状態を指摘することによりパウロは、神の裁きの基準は自分の都合の良いように勝手に変えられるものではなく、不変、絶対的なものであることを示唆しています。すなわち、1. 真理に則った神の裁きは不変に正しいのです。この基準のみが誰にでも適用されるべきなのです。

次にパウロは、2. 神の裁きは各自の行ないに従って下されると語っています。イエスも、「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおの行ないに応じて報いをします。」（マタイ 16：27）と語られ、ペテロも「人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。」（第一ペテロ 1：17）と、キリストの証し人たちに「あらゆる行ないにおいて聖なるものとされ（る）」ように、また、「真理に従うことにより魂を聖める」ようにと奨励しました。またイエスの愛弟子ヨハネは、死者が「おのおの自分の行ないに応じて裁かれ（る）」有様を啓示で示されたのでした（黙示録 20：13）。ヨハネはその光景をどのような思いで見たのでしょうか。神の御許には「記憶の書」、「あなたの書物」、「いのちの書」、「あの書」というように様々に呼ばれている数々の書物、神によって書き留められたひとりひとりの言行録が置かれているようですから、人間の外面（言動）だけでなく、内面（考え、動機、意志）をもご存知の神の裁きの恐ろしさは想像を絶するものとなるでしょう。パウロが語ったように、その日は、「神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日」なのです（第一コリント 4：5、ヘブル人 4：12-13 参照、下線付加）。

また、3. 神の裁きに「えこひいきなどはな（く）」それぞれが受けた光に応じて公平に裁かれます。律法の命じる行ないはすでに各自の心に書かれているので、すなわち、人には生まれつき「良

心」が備わっているのです。律法の与えられた民ユダヤ人、律法を持たない異邦人という霊的特権の有無に関わらず、異邦人であっても、もし律法の命じる行ないをするなら、正しいと認められるのです。このようにして、「律法を行なう者（は）正しい」という判決は誰にでも適用されるのです。モーセの掟のような詳細に亘る基準が与えられていなくても、人はだれでも良心に照らして、道徳的善悪の判断、弱者、病者、高齢者等助けを必要としている者への労わり、愛の配慮など、神の御旨にかなった行動をすることが期待されているのですが、イエスが、「主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」（ルカ12:47-48）と教えられたように、各自はこの世で受けた『光』—神、神の言葉、福音に関する知識—の多少に応じて裁かれるのです。しかし、パウロが続く教えの中で、律法を守ることでできる「義人」はこの世にはだれ一人いないことを人の矛盾行為に反映される罪の姿を浮き彫りにすることによって、「キリストの義」に頼る以外に人が神の御前に「義」と認められる方法はないこと、キリストの贖いを信じる信仰以外に罪人が神に受け入れられる方法はないことを明確にしていることを明記しておかなければなりません。

聖書には、神が人間史に御介入されて国家、都市、町村、土地、動植物、家畜、人に裁きを下されたことが多く記されていますが、これらの裁きはイスラエルの民や異邦人諸国が神の警告を幾度となく無視してきた結果の、神の御心ではない惨事でした。神ご自身のうちにそのような裁きに対して激しく相克する思いがあったことは、たとえば裁きの宣告の後、「わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こそう。またイサクとの．．．アブラハムとの．．．それにもかかわらず、．．．彼らを退けず、．．．契約を破ることはない．．．わたしは主である。」（レビ記26:42-45）と言われた言葉からも明らかで、神の、反逆のイスラエルへの一方的な誠実さは驚くべきです。預言者たちも「主はエジプトを打ち、打って彼らを癒される。」（イザヤ19:22）、「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きな哀れみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、私の顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたを憐れむ。」（イザヤ54:7-8）、「エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか．．．わたしはあわれみで胸が熱くなっている。わたしは燃える怒りで罰しない．．．」（ホセア1:8-9）「わたしは、．．．あなたの知らない、理解を超えた大いなる事を、あなたに告げよう．．．見よ。わたしはこの町の傷をいやして直し、彼らをいやして彼らに平安と真実を豊かに示す．．．初めのように彼らを建て直す．．．わたしにそむいたすべての咎を赦す．．．」（エレミヤ33:3-9）と、例を挙げれば切りがないのですが、裁き主なる神が同時に慈悲の神であることを繰り返し語っています。このように人間史においては、神ご自身がご自分の名、言葉、契約に誠実であるがゆえに、神の憐れみと恵みが反映されてきたのですが、しかし、「ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。」（第一テモテ5:24、下線付加、伝道者の書8:10-14参照）とパウロが警告したように、この人間史の時代に裁きを免れた悪事が永遠に見逃されたままに終わることは決してないのです。神の裁きをこの時代には免れても、「永遠の裁き」を免れることはできないのです。義なる神は必ず不義を裁かれます。

悪、罪を偏りなく裁く「義なる神」はご自分に矛盾しないお方ですから、「永遠の裁き」は下されなければならないのです。ここで持ち上がってくるのは、「裁き主」は誰か、キリストか神かという問題です。ヘブル語（旧約）聖書では父なる神を裁き主として描いていますし、新約聖書でもペテロはそのように語っています。しかし、イエスご自身、弟子たちに、「生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方である」（使徒の働き10:42、17:31、ヨハネ5:27-29）ことを明らかにされ、「父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました」（ヨハネ5:22）とはっきり言われたのでした。したがって、父なる神がキリストに万物に対する全権をお委ねになった期間、裁きの全権もキリストに委ねられたということになります。このことをパウロは、すべての裁きが終わり、万物がキリストに従わせられ、最後の敵である「死」も滅ぼされた後、「神がすべてにおいてすべてとなられるため」、キリストは「国を父なる神にお渡しになります」（第一コリント15:24-28）と教えていますから、先に挙げた三つの裁きの座に着かれるのは、イエス・キリストなのです。父なる神と同様に、慈悲深いキリストにとって人を裁くことは御旨ではありません。なるほど父なる神と同様に、「子なる神」の相克する思いは、「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。しかし、それがもう燃え尽きてしまっていればと、どうして願うことができましょう。」（ルカ12:49、下線付加。この邦訳の詳細は拙著「一人で学べるルカの福音書」文芸社参照）に如実に表れています。

神にとってご自分たちに似せて造られた人を裁き、滅ぼすことは断腸の思いなのです。しかし、キリストが最後の大使命をどのように遂行されるかに関して、イエスは、「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」（ヨハネ12:47-48、下線付加）と不思議なことを語られましたが、果たして終わりの日の裁きのとき初めて、その意味が明らかになるのです。すなわち、キリストの裁きの座で人を裁くのは、愛と憐れみの神、人間イエスではなく、永遠の真理「神の言葉」なのです。

死もハデスも、悪魔、墮天使、悪霊も、邪悪な者たちも地獄に投げ入れられるとき、「いのちの書」から名の消されなかった者たちは全員、晴れて「天の父の御国」に勝利の凱旋をすることになります。